

修士論文（要旨）
2010年1月

サラリーマンの職業的引退に伴う

心理的問題の克服のプロセス研究

指導 杉澤秀博 教授

老年学研究科
老年学専攻
208J6008
西村芳貢

目次

| | ページ |
|--------------------------------|-----|
| I. はじめに | 1 |
| 1. 研究の背景 | 1 |
| 2. 本テーマに関連する先行研究と課題 | 1 |
| 3. 研究の目的と実践的意義 | 2 |
| 4. 用語の定義 | 3 |
| II. 研究方法 | 3 |
| 1. 調査対象者 | 3 |
| 2. 調査方法 | 4 |
| 3. 回収方法と分析対象者の特性 | 4 |
| 4. 分析方法 | 5 |
| 5. 倫理上の配慮 | 6 |
| III. 結果 | 7 |
| 1. 全体のストーリーライン | 7 |
| 2. 会社中心の現役生活 | 8 |
| 3. 引退に向けての意識 | 8 |
| 4. 引退後生活のストレスと、それによって生じた心理的な問題 | 10 |
| 5. 引退によって生じた感情と意識 | 10 |
| 6. 解決方法の選択 | 11 |
| 7. 適応形態 | 12 |
| 8. 外部要因である「外部支援」 | 12 |
| 9. その他のカテゴリー | 13 |
| IV. 考察 | 13 |
| 謝辞 | 15 |
| 引用文献 | 16 |
| 資料 | |
| 図1 (A3 横) | |
| 表1 (A4) | |

I. 研究の背景と目的

本研究の発端は、研究者自身が間近の定年退職後の生活に危惧と関心を持っていたことと、同じテーマの研究報告²⁾の中に、「ストレスフルとなる可能性が高い、大企業のホワイトカラー層に絞った研究も必要」とのコメントを見て、本テーマの研究に踏み出した。

本研究の目的は、引退をきっかけに心理的な問題を抱えた元男性サラリーマン高齢者が、その問題を克服して新しい生活を築く心理的・行動的プロセスの解明と、そのプロセスに関わる要因を明らかにすることである。

先行研究としては、Atchleyの「退職の社会学」⁸⁾や、引退をきっかけにPsychological Well-beingが低下すると言及されているアメリカやドイツでの量的な研究^{1 2)、1 3)}などがある一方、東京都老人総合研究所の「定年退職に関する長期的研究」をはじめとする多くの報告^{2)、3)、4)}では、「サラリーマンの引退はストレスフルではない」と結論付けられていた。しかし、これらの研究報告^{2)、3)、4)}でも、ストレスフルでない生活を得るに至ったプロセスや要因は明らかにされておらず、心理的問題の発生と収束のプロセスについて言及したものは見当たらなかった。

II. 研究方法

調査対象者は、大企業の退職者によって構成される高齢者集団の中から、インタビューに協力を頂いた男性17名であった。

調査方法は、対象者個人に関する基礎指標や就業時の意識・生活状況、引退時の意識・生活状況等についてのインタビューであるが、先にアンケートを実施し、その回答を考慮し、1~1.5時間程度の半構造的インタビューを行った。

分析方法は、修正版グランデット・セオリー・アプローチ^{2 2)}で、分析テーマを「引退後のライフスタイル確立のプロセス」とし、分析焦点者を①「職業的引退後、生活行動に積極的で、活動的な日々を送っている人」、②「職業的引退後、生活行動に消極的で、活動的でない日々を送っている人」とした。

III. 結果

プロセスの順に示すと、本研究では、コアカテゴリーとして【会社中心の現役生活】【引退に向けての意識】【引退後生活のストレス】【引退によって生じた感情と意識】【解決方法の選択】【適応形態】が抽出された。

【会社中心の現役生活】を送ってきた人たちの【引退に向けての意識】は、[引退生活への期待と準備不足]と[不本意な引退]の2つのサブカテゴリーに分かれた。その後【引退後生活のストレス】に遭遇し、[引退によって生じた恐れ、不安感、疎外感]を感じて、[解放感と不安感が同居し、不安感の解消を意思]と[不安と疎外感のみ]に分かれたが、[不安と疎外感のみ]の人は、先の[不本意な引退]に多くの人が関係していた。

[解放感と不安感が同居し、不安感の解消を意思]した人は、【解決方法の選択】として[能動的に外部と交流]を選択し、【適応形態】として[外部との関係の確立]に至った。

一方、[不安と疎外感のみ]の人の多くは、[外部支援]を利用して、[受動的に交流を受け入れ]という選択をし、【適応形態】として[外部との関係の確立]に至った。

[不安と疎外感のみ]の人の一部は、[外部交流を拒否]を選択し、【適応形態】としては[周囲からの孤立]に至った。これらの人は、[不本意な引退]の該当者と高い割合で重なった

IV. 考察

引退時に心理的な問題を抱えた男性の元サラリーマンが、どのように心理的問題を抱え、対処し、克服してきたのかのプロセスを明らかにすることが出来た。

このプロセスでの、重要なポイントは、[不本意な引退]と[外部支援]で、引退直前の心理状態やゆとりと、引退後の生活の配偶者や友人からの支援が、引退後の心理に大きな影響力を持っていることが分かった。

引用文献

- 1) 東京都老人総合研究所社会学部門編『現代定年模様』東洋経済新報社、1993年
(東京都老人総合研究所「定年退職に関する長期的研究」1975～1990年に基づく)
- 2) 杉澤秀博、秋山弘子「職域・地域における高齢者の社会参加の日米比較」日本労働研究雑誌 487, 20-30, 2001年
- 3) 長田久雄、安藤孝敏「定年退職が精神健康と主観的幸福感に及ぼす影響」、『中年からの老化予防に関する社会科学研究：長期プロジェクト研究報告[中年からの老化予防総合的長期追跡研究]』東京都老人総合研究所、97-102, 2000年
- 4) 柴田博、西村昌記他「中高年齢者の職業からの引退過程と健康、経済との関連に関する研究」厚生省科研費長寿科学総合研究事業 H10～12年度総合研究報告書、2001年
- 5) 前田信彦「定年後の職業観：定年文化の変容とアクティブ・エイジング」社会学評論、56(1) 55-73, 2005年
- 6) 西田厚子他「自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究」人間看護学、4, 75-86, 2006年
- 7) 袖井孝子「定年退職 一 家族と個人への影響」老年社会科学、10(2), 64-79, 1998年
- 8) Atchley, R.C. 牧野拓司訳『退職の社会学』 99-119, 176-180, 1979年
- 9) 小寺隆史「老年期における危機と変容 引退を契機にめまいを訴えた1症例」精神療法、26(4), 381-387, 2000年
- 10) Reichard, S. Livson, F. Peterson, P.G. 「Aging and Personality: a study of 87 older men」 New York, Amo Presss, 111-128, 1980年
- 11) Jonsson, H. Josephsson, S. Kielhofner, G. 「Narratives and experience in an occupational transition: a longitudinal study of the retirement process」 American Journal of Occupational Therapy、55(4), 424-432, 2001年
- 12) Wang, M. 「Profiling retirees in the retirement transition and adjustment process: Examining the longitudinal change patterns of retirees' psychological well-being」 Journal of Applied Psychology、92(2), 455-474, 2007年
- 13) Pinquart, M. Schindler, I. 「Changes of life satisfaction in the transition to retirement : A latent-class approach」 Psychology and Aging、22(3), 442-455, 2007年
- 14) 篠田さやか「大都市における定年退職ホワイトカラー男性の地域社会への適応プロセス」桜美林大学大学院老年学専攻修士論文 2008年
- 15) 片桐恵子「定年退職者の社会参加のカイクロ・マクロモデルの構築」東京大学文学部・大学院人文社会系研究科博士論文 2006年
- 16) 松本康「ライフスタイルの展開」森岡清志ほか『伝統型消費都市における都市的生活構造の研究』昭和58-59年度科研費一般C報告書、84-100 1986年
- 17) 古谷野亘、安藤孝敏「新社会老年学 シニアライフのゆくえ」ワールドプランニング、2003年
- 18) 吉崎哲「定年退職者の生活適応感に関する研究」高齢者のケアと行動科学、5, 60-70, 1998年
- 19) 和田修一、平岡公一他「中高年齢者の職業と生活：定年退職を中心として」東大出版、1983年
- 20) 川喜多二郎「発想法 一創造性開発のために」中公新書 1967年
- 21) 川喜多二郎「続・発想法 一KJ法の展開と応用」中公新書 1970年
- 22) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007年